

歴史的寺院空間における芸術文化の創出と発信
～岐阜アートフォーラムの活動報告・東日本大震災との関わりの中で～

Creation and share art culture in the environment of historical Japanese temples.
～focused on the relationship between art and the recent Great East Japan Earthquake.～

草野次郎*	小笠原 宣**	衣笠文彦***
KUSANO Jiro	OGASAWARA Nobu	KINUGASA Fumihiko
佐部利典彦****	二村元子*****	堀 祥子*****
SABURI Norihiko	FUTAMURA Motoko	HORI Sachiko
佐藤昌宏*****	河西栄二*****	奥村晃史****
SATO Masahiro	KASAI Eiji	OKUMURA Akifumi

Gifu Art Forum is a cultural organization which aims to create and share art culture in the environment of Japanese temples. In order to achieve this goal, it carries out various projects, including exhibitions and concerts. In 2012, it won the Gifu Municipal Award of Citizens' Participation for its seven years' contribution to society.

Last year's project focused on the relationship between art and the recent Great East Japan Earthquake. After a visit to the Tohoku District, Kusano composed music for people in the district, with deep compassion for his fellow countrymen. Children who had taken refuge in Gifu from the stricken area joined local children in making pictures and poems inspired by Kusano's music. On the day of the concert, their completed works of art were displayed in the main hall of the temple. Children sang in chorus, and some members of the forum played cello and piano for the audience.

The present article reports on the various projects conducted by the Gifu Art Forum over the past eight years. This summary attempts to clarify the role art and music may be able to play in times of disaster. It also aims to evaluate the achievements of the forum, as well as to identify some problems to be dealt with in the future.

キーワード：寺院、ワークショップ、コンサート、児童合唱、震災支援

Key words : temple, workshop, concert, juvenile chorus, earthquake disaster support

序

本稿は、筆者らが2006年から行っている「岐阜アートフォーラム」という活動の内、2012年秋に実施したアートコンサート¹⁾の実践報告である。

岐阜アートフォーラムとは、「寺院空間における芸術文化の創出と発信」をテーマに、岐阜市大門町の仏教寺院である上宮寺や東別院を活動の拠点とし、寺院の本堂・庫裡・境内・茶室などの空間を用いた美術作品展やコンサートによるプロジェクトを実施する文化団体である。本活動は、時代や表現形態に既定される事なく普遍的に存在するはずの芸術活動の意味とその魅力を明確にすべく進められてきた。そして2012年11月には、まちづくりに貢献したとして岐阜市より「市民参画賞」の表彰を受けている。

活動名のフォーラム（集まる場所）という言葉には、

表現者・鑑賞者という垣根を超えて、市民とともに文化や芸術を育んでいこうという意味がこめられている。

実行委員・スタッフは、上宮寺住職の小笠原宣²⁾、彫刻家衣笠文彦³⁾、作曲家草野次郎⁴⁾を中心に、美術作家や音楽作家、そしてその活動に賛同する一般の方を加え、総勢30名ほどのメンバー⁵⁾により構成されている。

2006年に始まった岐阜アートフォーラムの活動は、2012年10月には第4回を迎えるに至った。詳しくは、これまでの研究報告⁶⁾を参照して頂きたいが、各回のタイトル、日程などは以下の通りである。

- 第1回岐阜アートフォーラム～時空の住処（すみか）～衣笠文彦彫刻展、2006年10月28日（土）、上宮寺（本堂、庫裏、茶室を用いた彫刻作品展）
- 第2回岐阜アートフォーラム～時空の住処～四人の芸術家による表現会（ひょうげんえ）

*兵庫教育大学大学院教育内容・方法開発専攻文化表現系教育コース **画家、上宮寺住職

岐阜聖徳学園大学短期大学部非常勤講師 *画家 *****彫刻家 *****名古屋女子大学文学部児童教育学科

*****岐阜大学教育学部美術教育講座

平成25年4月25日受理

(庫裡での絵画、彫刻の作品展と作曲、本堂でのチェロコンサート)、2008年10月25日(土)、上宮寺

●第3回岐阜アートフォーラム～時空の住処～
アートコンサート 2010年10月3日(日)

(本堂での絵画を基にした映像表現とヴァイオリンによるアートコンサート、及び境内・庫裡・茶室を用いた彫刻作品展)

●「来て着て聴いてお寺でチャチャチャ」
Tシャツ染色ワークショップ

(小学生対象の寺院本堂縁側でのアートワークショップと境内での楽器作り、及び本堂での演奏会)、
2011年7月25日(月)26日(火)、東別院

●第4回岐阜アートフォーラム～時空の住処～
響きあう心 金谷昌治チェロコンサート

(本稿でその内容は詳しく述べる。)

2012年10月14日(日)、東別院

7年の活動の中で5回の大きなイベントを企画・運営し、次第に内容の広がりが出てきたと感じている。

本論は、この内の第4回の「岐阜アートフォーラム」の活動報告である。それは東日本大震災の被害を前にして、「我々に、アートに、何ができるのか」を考えることでもあった。

一 本稿の構成

本稿の構成は以下の通りである。

1章では、第4回のアートフォーラムへ向けての構想の経緯について、震災後の東北への訪問や関わりを通して、被災後に岐阜へ避難してきた方との意見交換などを経て活動計画が検討された経緯について記す。

2章では企画が決まった後の実践についてまとめた。

1節ではコンサート前日までの実践の様子について、作曲家草野が東北への想いをこめた作曲について、またその曲を聴いたイメージを基に、被災地から避難した子どもたちも、地元の子どもたちと一緒に活動した絵画制作や作詞活動、合唱練習について、寺院本堂へ子どもたちの絵を飾ったコンサート会場の設営準備などについて記す。

2節では、コンサート当日の実践について、チェロの演奏、子どもたちの合唱などについてまとめた。

3章では、本実践における芸術活動と震災への関わりの方針について整理した。アート表現者として震災を前に被災者の方たちと、どのような関係をつくれるのか。そしてどのような発信ができるのか、我々の目指す方向を確認し、その成果について考察した。

4章では課題について記した。被災者の心情への配慮はどうだったか。芸術の本質的な意味を問う活動たりえたかを検討した。(衣笠、河西)

I 構想 はじめに、東北への想い

美術と音楽の多角的な出会いで構成する企画展を既に岐阜で2回行っている。しかし今回の第4回目はこれまでとは違い、2011年3月11日に発生した東北の大惨事に接してわれわれの想いをここで何らかの形として伝えたいと考えた。この未曾有の大惨事は想像を遙かに超えたところにあるが、しかし他人事ではなく私たち個人の問題として受け止め、そこに芸術というジャンルがいかに対応し得るのか。このあまりにも巨大な惨状に、単一つのレクイエムとしての作品を提供するだけではなく、我々は社会の一員としての責務、つまり人間としての務めをこの会を通して、何らかの形で表現したいという方向性を共有するに至った。そして大震災のほぼ1年後、2012年3月に私を含めた岐阜アートフォーラムの企画者4名がその現状を身体で知るために福島県、宮城県に赴いた。(草野)

一 東北訪問

2012年3月15日、草野、小笠原、林進一⁷⁾、衣笠の4名はそれぞれの思いを抱きながら東北・仙台の地に立った。報道などであふれるほどの情報に接してきたが、やはり実際の光景を目の当たりにすると現場を踏むことの重要性を実感させられる。現場で受ける情報とは360度の視界、現場の人たちとリアルタイムで共有する時間・空間のことである。いくらマスメディアの情報の質、精度が上がろうとも、それはあくまでも間接的な情報として我々に届く。

アートフォーラムのメンバーは、それぞれが何らかの表現手段を持つプロフェッショナルの集団である。自らの五感で感じ取ることが今回の活動の第一歩になるという直感が正しかったことを自ら証明できたように思う。

車を駆って仙台から石巻へ北上後、松島を経て太平洋岸を南下。福島第一原発の手前で交通規制。道中、さまざまな光景に出会いながら、車中での時間は4名のそれぞれの思いを心に刻み、考えを紡いでいく時間となった。この旅を通して半年後のアートフォーラムの発表活動で何ができるのか、答えを探らなければならない。

移動の途中、小笠原手持ちの放射線測定器が示す数値に驚きながら、福島市の金谷昌治⁸⁾と合流。被災者でもある彼の話を聞きながら発表内容を検討していく。その際、繰り返し確認されたのは、東北・福島の人々との関わりを「被災者」「非被災者」という二元的なくくりで扱うことだけは避けたい、ということであった。この問題意識はその後の打ち合わせでもたびたび議題に上ることになる。芸術活動にかかわる根源的な問題にもつながることだからである。(衣笠)

次に草野が音楽と東北の関わりについて述べる。

仙台空港からまず向かった宮城県石巻市の某小学校。凄まじい津波の破壊力で一瞬にして引きちぎられたかの

ように校舎の1階すべてはほぼ壊滅していた。壁に掛かっている時計が津波の到達時刻でこと切れたかのように止まっているのが余りにもむなしい。さらに子どもたちの描いた楽しい遠足の絵が教室の壁に破れて引っ掛かりそのままになっている状況は、記憶から消えない。学校の敷地の隅には、所々花が手向けられてその中には子どもたちの好んだキャラクター人形が多く置かれている。想像するだけで心が痛み、張り裂ける思いがする。さらに福島へ場所を移動する車中から見える光景は、基礎部分しか残っていない住宅街の跡地が延々と続く。1年経過しても全く手付かずのままである。その途中、ほぼ全壊の家屋を覗くと、その庭には津波で窓から放り出されたアップライトピアノ（写真1）が無残な姿を呈している。家族団らんを司っていた楽器が今や変わり果てた姿となっている。

このような現実を目の当たりにして、今回の企画の具体案が私の中に徐々に固まっていった。その詳細は次章で述べることにする。（草野）



写真1 津波で庭に放り出されたピアノ

ー2 東北での関わり

佐部利典彦⁹⁾は、2012年の4月から5月まで岩手県の山田町と大槌町でアートと音楽を中心とした活動を行った。震災から1年がたち、心に関わる事が必要とされてきていると現地の情報などから判断した。ただ単に展覧会やコンサートを行うのではなく、美術や音楽を通して、同じ時間を共有し、交流することに意味があると考えた。活動の概要：チームすどう美術館¹⁰⁾によるアートワークショップ

指導者：すどう美術館と関わりのある作家及び美術館スタッフ

活動内容：缶バッジづくり、ビーズのアクセサリづくり、油絵制作

作家作品展：すどう美術館コレクション「菅創吉」展、及び21人の作家による現代美術展

作品点数：菅創吉20点 その他60点

コンサート：ヴァイオリン大鹿由希、ギター橋爪晋平
参加者 小学生から高齢者までのべ約300名、
4月27日～29日 岩手県山田町中央公民館小ホール、
4月30日～5月1日 岩手県大槌町中央公民館3階大ホール

アートワークショップでは、参加者が楽しむことができるということを第一に考えた。我々と色々な話をしながら、存分に楽しみ、表現に没頭してもらう。また完成した作品は仮設住宅に飾ることができたり、日常生活で身につけたりできるように考え、缶バッジづくり、ビーズのアクセサリづくり、油絵制作を行った（写真2）。



写真2 「東北での関わり」ワークショップの様子
子どもから高齢者まで多くの方が訪れた

次に展覧会では展示に参加する全ての作家が震災で傷ついた東北での展示を意識して新作を制作した。作家はそれぞれに震災を捉え、会場で東北と向き合うことを考えた。それと共にすどう美術館のコレクションである菅創吉の展示を行った。菅創吉は人間の本質を捉えた作家であり、今回は是非、東北の方に観てもらいたいと考えた。

コンサートについては、来場者とより近く接することができるように配慮した。ヴァイオリンとギターの体験教室と演奏会では、楽しそうに楽器に触れながら、短時間に一曲マスターする姿がみられた。作品が展示されている場所をコンサート会場にすることで、作品は舞台装置としても効果的であった。

来場者と一体感がもてるように、演奏者と客席の距離を近づけたり、会場の雰囲気や演奏者の感覚で毎回プログラムを変更したりして客席とやりとりをしながら行った（写真3）。



写真3 「東北での関わり」コンサートの様子
演奏者と観客が近い距離で行われた

岩手での活動では、毎日来場する人もあり、存分に制作や交流を楽しんでもらうことができ、一体感のあるコンサートは聴衆の心にしみた。

御自身も被災し昨年は会場の設営、撤去作業を手伝い、コンサートやワークショップに参加した方からうれしい話を聞いた。「昨年のすどう美術館の活動がなければ、一生、アートに触れることも興味を持つこともなかったでしょう。コンサートはとても胸を打たれたし、油絵制作は没頭してしまいました。自分で制作した油絵作品は仮設住宅の玄関に、すどう美術館からプレゼントでもらった作品は、ワンルームの居間に大事に飾ってあります。仮設の家の壁に何も無いのと絵があるのでは部屋の感じが全く違います」と。この話は我々が「そうなるといういなあ」と思っていた通りのものであり、活動の方向性は良かったのだと確信することができた。

私は出会いの時からその人のことが気になり常に注目してきた。はじめは「ワークショップも絵を観ることもコンサートも手伝いはするけど興味はないので参加はしません」と話していた。しかし毎日、会場に様子を見に来て、そのうちに「ワークショップやってみようかな」「コンサート、すごくよかった」と言うになり、最後には油絵に没頭し、コンサートに涙し、絵も何度も繰り返し観ていた。アートに触れたことで、興味を持ったのは事実だと考えるが、それとともに固まっていた彼の心を、ほんの少しだけほぐすことができたのではないかと捉えている。それは、作品やワークショップ、演奏だけではなく、大槌町を訪れた人たち（チームすどう美術館）との出会いもその要因の一つであることに違いない。

この経験によってこのような企画を続けることの必要性を感じ、岐阜でも何かできるのではないかという思いが、今回の活動につながった。（佐部利）

一 3 打ち合わせ会

4月14日と6月30日に実行委員会を行い秋の演奏会に向けての打ち合わせ会を実施した。4月の集まりでは先の東北視察の報告を皮切りに各委員がそれぞれの思いを発言するが、なかなか意見の集約を見ることができない展開となった。

後述されるように被災された方々とどう向き合うのかなどの問題もはらみ、大震災・原発事故をどのように解釈し発表活動につなげていくのか、当然のことながら、早急に結論を見出すことができるはずもない。

芸術家として今回の大震災をどのように解釈し表現活動に昇華できるのか。今秋の演奏会実施まで半年間、各自が悩み、模索していくことになった。

その後次回打ち合わせまでの2ヶ月の間、小笠原を中心に企画の内容や東北の方との関わり方の検討が行われてきた。テーマタイトル決定にあたり、企画の軸に金谷のチェロコンサート据え、被災者との交流をはかり

つつ、震災とアートの関連を探る模索が始まった。仮称テーマタイトルを「福島のことろー被災地・東北から祈りのことろとどけー」とし、演奏担当の金谷、作曲担当の草野は着々と演奏内容の構想を固め、実現に向けて進みつつあった。

6月の打ち合わせでは、実行委員会として本活動の意味づけを明確にすることが目標であった。委員各自が宿題として持ち帰ったさまざまな課題の答えを披露しつつ、議論を深めた。

東北を応援したいという想いは、スタッフの誰もが共有していたが、それをどのようにアートフォーラムの企画に反映させるかは個々に考えが異なり、様々な意見が出された。実際に震災の被害を受けた方にとって押し付けなのではとの発言もあった。

打ち合わせ会には、被災者支援活動を続けている小森真人⁵⁾と、被災地から避難してきた家族にも参加を依頼し、避難してきた方の率直な気持ちを聞く貴重な機会となった。福島や岩手から岐阜近郊に避難して来ている家族のY氏⁵⁾やK氏⁵⁾からは、津波が襲った時刻になると、具合が悪くなる子どものことや岐阜での暮らしぶりについて伺い、ここで、「私たちが被災者として特別視しないで欲しい」との切実な声を聞いた。

今後は同じ町に暮らす知人として、自然豊かな岐阜の長良川や金華山で家族一緒に遊ぼうという話で盛り上がった。また今回の活動にも協力してもらうこととなった。

被災した方の言葉は、今回アートフォーラムの企画の根幹そのものを問い直す問題提起となった。

その後、お互いの信条、感性の違いを尊重しつつ、演奏会の実現に向けて意見を集約していく作業が続いた。あるいはこの作業こそが「岐阜アートフォーラム」の本質的な存在意義であるのかもしれない。

こうした中でタイトルも変更することとなったが詳細は以下の通りである。

まず「被災地」「被災者」「福島」「東北」などの具体的な事例語から見直し、いかに彼等と共通表現を発見するかの議論を繰り返した。その結果、仮称「福島のことろー被災地東北から祈りのことろとどけー」を「響きあう心」と改めた。これは議論を深めていく過程で、救援者・被救援者、加害者・被害者等の対立する既成概念を越えて、私たち自身のアート活動の原点である、「より自由で平等なアート表現者たえよう」と言う共通概念を再確認できたからだと言える。この確認作業が、金谷のチェロコンサートに向け、子どもたちとの絵画共同制作、草野の曲に福島や岐阜の子どもたちが作詞するなど、一連の実践活動の基調となった（衣笠、小笠原、河西）

II 実践

ー1 コンサート前日までの活動

ー(1) 作曲

前章での東北訪問の後、この悲惨な現実を直視しすぐさま芸術活動に移行することはかなりの部分でためらいがあった。生死の狭間を体験した人々に対してわれわれ第三者として一体何が出来るのか。傍観者としての共感を芸術作品で表したところで何の意味があるのか、これまで自分自身が信じてきた芸術表現の意味・目的がこの現実を目の当たりにして揺らぎ出した。たとえば音楽作品ではこのような状況において《鎮魂歌》、つまり《レクイエム》というものがあり、それはそれで重要な意味を持つ作品種ではある。ただ、作曲家が多くの《レクイエム》を高度な技術で作曲し演奏したところで、果たして「今」「現実」の救いに直結するのか。むろん長いスパンで見れば、それは大いに人々の心の救いに繋がるのだろうが、あの現場を見た私にとってはそれではあまりに手ぬるいと思えなかった。一日も早く人々の中に笑顔や勇気や希望、と言ったものを音楽家や美術家が集まったこの岐阜アートフォーラムから生み出せないだろうか、と感じた。

そのような想いを巡らせた結果、一つの結論に至った。今回の美術が行うワークショップと同様の発想で、音楽も私が一方的に作品を完成させて発表するのではなく、作品を完成させるプロセスにおいて被災した子どもたちと共同で制作にあたり、それを共同で発表する、という原案である。

むろん作曲するためには最低限の技術等が必要だが、その部分は私が担い、子どもたちにはその先の部分で自由に参加することが可能となるための音楽的な「器」を構成することを考えた。具体的には、子どもたちが想いを込めて歌える曲の完成を最終目的とするのだが、まず私が歌詞の付いていない旋律を作曲して、その後子どもたちに歌詞をその旋律に書き込んでいってもらい、彼らの思いを投入してもらおう。さらに歌詞の内容に合わせて旋律の音型やリズムを柔軟に変化させて一つの完成体に導く、という流れである。

旋律の作曲に於いては以下の部分に留意し構成した。

1. 歌詞の内容を組み立てやすいように、旋律の構造を「起(句)・承(句)・転(句)・結(句)」の4つの文脈構造と合致する形とする。
2. 子どもの声域を考慮しつつ、旋律の音程を「起・承」から「転」「結」へと徐々に高くなるように設定する。
3. 「結」では音楽的なクライマックスを同時に設定する。
4. 歌詞の文字数に自由度が可能となるように、同音反復を多く配置してリズム的分割・統合の余

地をつくり、様々な歌詞に対応できる旋律の原形を作る。

上記の4点の留意事項を踏まえた上で、以下の旋律を考案した。

〔譜例1〕旋律 「岐阜の子どもたちへ in A 旋律のみ」
(本論末尾に掲載)

まず、アウフタクトからの8小節間が「起」の部分にあたる。2小節ごとに基本音程が2度ずつ上昇するように設定している。

その8小節間を繰り返すことで「承」の部分としてバランスをとることとした(子どもの歌にとって「繰り返し」は重要で、同時に曲の難易度も抑えられる)。

10小節目アウフタクトから8小節間が「転」に相当する。ゼクエンツの作曲技法で音楽的エネルギーは徐々に蓄積されて「結」に向かって強力なベクトルを示す。

18小節目アウフタクトから10小節間が「結」となり、曲の最高音を含めて、全体のクライマックスを形成する。

以上が曲の構造の簡単な説明である。そして次の段階では〔譜例1〕の音源を子どもたちに聴かせて、この歌への意味を伝えてその歌詞を募ることとした。その結果、3名の子どもから歌詞が寄せられた。その内容は(3)節で紹介したい。(草野)

ー(2) 絵画ワークショップ

開催日時：2012年8月25日(土) 10時～15時

会場：岐阜市上宮寺境内 指導：佐部利典彦 参加者：約20人

2012年の春に岩手県でアートの活動をした実感から、東北に関わる活動を継続して行いたいと考えた。今回は東北から岐阜に転居している家族と地元の人と一緒に表現活動することに重点を置き、あえて互いの出所を知らせることをしなかった。なお、ワークショップ用チラシ(写真7)のイラストを佐藤瑛気¹⁾に依頼した。柔らかなパステルのタッチは、温かく楽しい雰囲気を出していた。200部印刷し呼びかけを行い、約20人の子どもたちが集まった。

午前の部では、境内に用意できる可能な限りの大きな画面に参加者全員の共同作業で、ペインティングをしていく。できるだけ大きな画面で非日常を感じてもらいながら一人一人が身体をつかってのびのびと活動ができるように考慮した。活動のきっかけとして今回のプロジェクトのために草野が作曲し、参加者から詩を募り、コンサートで披露したいと考えた曲を流した。また、大きな画面とカラフルな絵具や、ローラーなどの道具を活動しやすいうように配置することによって参加者は開始前の段階で活動への見通しと、期待感をもつようにした。始めから絵具を使うのではなく、今回は行為と造形性の観点から、マスキングテープをちぎって貼る活動を最初に取り入れた(写真4)。マスキングテープでドローイング



写真4 絵画ワークショップ
マスキングテープでのドローイング

をするイメージである。身体を使ってちぎって貼るとい
う行為を行いながら、その最中に制作のイメージをもた
せる。アクションペインティング的な活動では、イメージ
性は希薄になることが多いので、はじめに少しイメージ
の要素を取り入れようと考えた。また、着色をした後
にテープを剥がして、定型的な線やかたちを表出させる
こと、紙の新鮮な白を表出させることを考えた。マスキ
ングテープでの活動の後、絵具を飛び散らしたり、ロー
ラーで着色を行ったりした。画面には、水分の吸収が良
く、色のにじみのきれいな和紙を使用し、サイズは、本
堂への展示サイズと境内の広さを考慮し、できるだけ大
きいサイズで4.5m×9mに設定した。

次に昼食の時間では初めて顔を合わせる子どもたちも
いるので、良い交流の時間になると考えた。一緒におに
ぎり頬張りながら自己紹介を行った。

午後の部では、自分のやりたいことを存分に行うた
めに個人制作を設定した。画面の大きさは4.5m×0.9mに
設定した。個人作品もコンサート会場に設置する予定で
やはり、展示の都合と境内での活動のできる可能な限り
の大きなサイズを考え設定した。午後からの活動のき
っかけは型紙である。イメージは「最近、気になるかたち」
とした。画用紙に描き、切り抜く。切り抜くことを考え
て、かたちをデザインする。全て自由にペインティング
を行うような造形遊び的な活動ではなく、自分を見つめ
る時間を設け、個人の表現を引きだそうと考えた。さら
に活動のイメージや見通しがもちやすいのではないかと
考えた。

午前の活動で、要領を理解しているので、後は各自で
制作を進めていく。参加者とスタッフで交流しながら完
成を確認した人から活動終了とした。

境内の中心にある大きなイチヨウの木の下に画面を用
意し、夏の日差しを避けながら、カラフルな絵具を透明
なバケツに用意して、色がよく見えるようにしたり、ロー
ラーなどの道具も使いやすいうように種類ごとにまとめ
たりした。この様子を見るだけで、子どもたちは、どんな
活動をするのか大体想像がついて、「あれ使ってパーっ
とやっていいの」などという質問をする。それゆえに活

動における「場の設定」「環境作り」が非常に重要な
のである。マスキングテープでのドローイングでは、東北
からの参加の児童がテープを使って家を描いていたのが
印象に残っている。震災の影響もあるのではないかと考
えさせられた。その後、着色の段階になっても、その児
童は他の児童が自分の描いた家のスペースに色を付けら
れるのを非常に嫌がった。今まで何度も、共同作業での
ワークショップをしてきた中ではじめての経験であった。
この状況を見た時に午後からの個人制作を設定しておい
てよかったと思った。前半は白・黒は出さないで制作し
た。はじめから白・黒を使って色がにごるのを防ぐため
である。後半は白・黒を追加し、色に幅と深みを追加で
きればと考えた。参加者は時間と共に行為が面白くなり、
どんどん絵具をのせていく。参加者と美しさを確認しな
がら、存分に活動をしてもらいたい気持ちと美しいとこ
ろで終えてその美しさを共に味わいたい気持ちが交差す
る。午前中は画面がにごるぎりぎりのところまで活動し、
終了した。予定時間より30分程早く終えたことから、参
加者がかなり積極的に活動できたと考える。幼稚園年長
の幼児は、飛行機のかたちの型紙を制作し、空や雲のイ
メージを和紙の白い部分を効果的に用いながら表現して
いた。午前中に自分のスペースを守ろうとしていた児童
は、自分のスペースに安心して表現していた(写真5)。



写真5 絵画ワークショップ
個人制作の様子

実践の留意点と期待点は、以下の通りである。

- ・参加者が時間を忘れて、身体と頭と感覚を使って存
分に表現活動をする。
- ・造形遊びではなく作品とするために、時間や画面サ
イズの設定・技法などを工夫する。
- ・東北の子と地元の子と制作や昼食を通して交流する。
- ・お寺ならではの雰囲気や場所性をうまく利用する。

存分に活動をするという点では、広々とした寺院の野
外空間を活かして、大きな画面での共同制作と個人の制
作が充分できたと考える。また、マスキングテープや型
紙の使用は造形遊び的要素の強い活動の中で造形性の観
点から効果的だったと考える。

造形活動で同じ時間を共有すると、仲良くなる時間が
普通よりは短いと経験上感じたが、今回は充分に交流す

るには時間と手立てが足りなかった。より深めるためには継続的な活動にしたり、グループでの活動形態にしたりするという工夫も必要だと考える。(佐部利)

一(3) 音楽作詞、合唱練習 2012.9. 25

一① 音楽作詞

前述のコンセプトに基づき、事前に作曲した旋律に3人の子どもが詩を提供した。3人の中の2人は東北で被災し、岐阜に疎開している子どもでもある。

3つの詩は以下の通りである。

- | | | |
|----|------------|--------------|
| 1. | あめあがりのそらを | にじがかかっている |
| | あめあがりのそらを | そらをにじがかかっている |
| | ことりがとんでいる | ことりがとんでいる |
| | おひさまのひかりが | さしこんでいる |
| | まわりのふうけいは | やまにかこまれている |
| | トランペットがおか | でなっている |
| 2. | あおくひろがるだいち | きみはとびたつんだ |
| | ゆめときぼうをのせて | みらいへとはしてゆけ |
| | きみならできると | きみにはできると |
| | みんなでちからを | あわせあわせとべよ |
| | いまひかるときよ | いまみらいにはしる |
| | きつとみらいは | すばらしいだろう |
| 3. | みんなみんないれば | みんなみんないれば |
| | みんながんばれるよ | がんばれるがんばれるよ |
| | たとえさみしくとも | たとえさみしくとも |
| | みんながいるから | だいじょうぶだよ |
| | みんながいるから | だいじょうぶだよ |
| | みんながいるから | だいじょうぶだよ |

以上3つの歌詞に関しては、旋律との修正はほとんどなく、歌詞の意味、つまり子どもたちの想いと旋律の抑揚は問題なく一体化し融合した。なお1フレーズの反復(最初の8小節間)は歌詞の関係上削除し、全体の流れを優先した結果、A-B-Cの歌唱3部形式に落ち着いた。さらに曲名に関しては、当初《未来に向かって》と仮題を設定していたが、最終的に3番の歌詞から引用し、《みんながいれば》に決定した。(草野)

[譜例2] みんながいれば(本論末尾に掲載)

一② 合唱練習

作詞された曲をコンサートで発表するために、実行委員から、ワークショップに参加したり、作詞に携わったりした子どもたちに合唱をしてほしいとの願いが出てきた。しかし合同で練習をする時間や場所、また指導者不在などの問題から、集まった練習を断念せざるを得なくなった。そこで作詞をした子どもたち数名にCDと

楽譜を渡し、各自練習してもらうことにした。また、当日少人数でいきなり本番となることは、子どもたちに負担が強いられ、さらに広い東別院の本堂では声が届かないことも考えられたので、上宮寺近郊で活動している岐阜市の岐阜少年少女合唱団や大垣市のNPO法人リトミックGIFUに参加を要請し、各団体の指導者には通常の活動範囲内での合唱指導を依頼した。子どもたちにとって、新たな発表の場となり、また交流の機会になるよう期待した。コンサート前日、草野と守山繭子²⁾により、岐阜少年少女合唱団の練習場で合唱練習が行われた。リトミックGIFUは活動曜日でないこと、移動手段がないことなどにより、当日のリハーサルで合わせることになった。(二村)



写真6 東別院の本堂
絵画作品展示の準備作業の様子

一(4) コンサート準備、会場設営

今回、上宮寺の5倍の広さをもつ東別院(写真6)へと会場を移した。観客が寺院のもつ独特の雰囲気を感じ、さらに絵画によって包まれているような空間に変化させるために、ワークショップでの子どもたちの個人作品を本堂の両脇に配し天井から吊した(写真9)。そして、みんなで描いた巨大な絵画を中央に配し、それがコンサート中に一瞬で垂れ下がるように計画した。

またコンサート最中に後ろから光を当てるという演出が佐部利より提案された。これは後ろから光を当てること、マスキングで白く残した部分や絵の具のにじみが、よりきれいに見える効果を期待したからだ。天井が高く、梁を傷つけないよう慎重に作業する必要があり、予想以上に時間がかかったが、巨大絵画をロール状にして天井に固定し、1度試した後、当日の朝に設置し直した。

当日の会場設営では、録音・録画機材、照明機材、椅子等の準備、合唱の子どもたちの控え室・受付等の設置が行われた。

また宣伝用にチラシ2000枚、ポスター(写真8)100枚を印刷し、実行委員の協力の下、近隣の寺院・画廊・商店・大学などに配布しチケットの販売も行った。さらに広く地域住民に知ってもらうため、各新聞社に取材を依頼した。(二村)

一 2 実践当日

「第4回岐阜アートフォーラム～時空の住処～
響きあう心 金谷昌治チェロコンサート」

一(1) 概要

2012年10月14日(日) 15:30～17:30

会場：岐阜東別院・本堂 コンサート出演・担当：チェロ演奏・金谷昌治、ピアノ伴奏・谷峰子¹³⁾、作曲・構成・草野次郎、司会・高橋かずえ、
主催：岐阜アートフォーラム実行委員会、
後援：岐阜市教育委員会・寺院を活かしたまちづくり推進協議会、企画・衣笠文彦

2012年8月25日(土) 10:00～15:00 会場：上宮寺(境内) 絵画制作・指導、佐部利典彦・二村元子¹⁴⁾

2012年9月15日(土) 10:00～12:00 会場：上宮寺
作詞の披露・歌唱指導・草野次郎・守山繭子

一(2) 実践 コンサート内容

今回の岐阜アートフォーラムのメインである「チェロコンサート」は、2012年10月14日岐阜東別院本堂で行った。チェロ独奏は金谷昌治、ピアノ伴奏は谷峰子。金谷は第2回岐阜アートフォーラムで既に独奏を行っており、この会の趣旨（美術作品と音楽演奏会の融合）に賛同し今回再び参加した次第である。普段のコンサート会場とは異なる寺の本堂での演奏（写真10）は、響き的には残響の少ない乾いた音となり、チェロの深い響きと幅広い表現をつくりだす物理的な倍音成分が極端に少なくなる。しかしそのマイナス面があるにもかかわらず、金谷はこの場での演奏会をきわめて有意義な場と捉えている。それは、この特殊な空間での聴衆との距離の近さによる、響きを越えた表現伝達密度の濃さというものが存在するという。通常の残響豊かなホールでは確かに楽音そのものが美しく磨き上げられ、演奏自体が独自の芸術性を持ち出すが、ある意味それは聴き手との一定の距離をつくり出しているとも言えなくない。その点、今回の寺の本堂という特殊な空間は、逆に音楽の「生の」表現を直接伝えることが出来ると金谷は語っている。



写真9 コンサート準備
本堂の両脇天井に吊した子どもたちの個人作品



写真10 コンサートの様子
本堂で演奏する金谷(右)と谷(左)



写真11 コンサートでの合唱
聴衆と共に全員で歌った

演奏会全体は2部で構成し、プログラムは以下の通りである。

【第1部】

1. 鳥の歌 (パブロ・カザルス)
2. この想ひ、届け東の空に (編曲：草野次郎)
3. みんながいれば (詩：東北と岐阜の子どもたち3名
曲：草野次郎)

【第2部】

1. タイスの瞑想曲 (マスネ)
2. 花の街 (團伊玖磨)
3. 浜辺の歌 (成田為三)
4. チェロのための組曲「風の谷のナウシカ」より (久石譲)
5. 明日へのプレリュード〈アヴェ・マリア〉 (バッハ：グノー)
6. 華麗なるポロネーズ (ショパン)

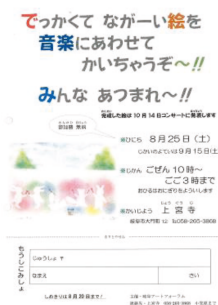


写真7 絵画ワークショップ
チラシ 原画 佐藤瑛気



写真8 ポスター
原画 小笠原宣
制作 神谷まさ子

[第1部]は今回のテーマである東北大震災への追悼的内容で固めた。冒頭、カザルス《鳥の歌》で故国を想う哀愁に満ちた抒情的名曲によってまずは追悼の念を表した。次に《この想い、届け東の空に》は東北民謡をメドレー式に綴った編曲である。本来、オーケストラと合唱のために編曲されたものを、今回の演奏会のために草野がチェロとピアノ用に再アレンジした。内容は、〈斎太郎節（宮城県）〉〈南部牛追い唄（岩手県）〉〈会津磐梯山（福島県）〉で、被災したそれぞれの県の有名な民謡で構成している。そして前半の最後に今回のテーマのメインとも言える児童合唱曲《みんながいれば》を発表する前に、子どもたちが夏休みに制作した巨大な絵画が天井から舞台後方全面に下ろされた。これは子どもたちが制作した美術作品と音楽作品が最終的な融合をこの場で完結させるためである。さらにプログラムに印刷されている歌詞を使って会場の聴衆が共に参加し歌えるようにと、聴衆との歌の練習を一度試み、本番では歌詞の第3番までを聴衆も含めて全員で歌った（写真11）。演奏は子どもたちの生き生きとした歌声が響き渡り、当初の計画は予想以上の効果をもたらした。子どもたちの絵に包まれながら音楽としての表現性がそこに加味されて、美術と音楽の充実した結びつきがこの瞬間に実現し得たと言える。（草野）

Ⅲ 成果

ー1 音楽について

私は今回の東北訪問以降、ここでの音楽がなすべき役割に関して様々な思いが交錯し紆余曲折した。しかし被災した人々やそれ以外の人々も含めて、最終的に音楽を通じてその心的痛みが共有でき、そしてその先に「何らかの希望の光が生まれるような場を作る」という意味での今回の子どもによる詞と私の旋律との、いわば「合作」発表は聴衆も含めて最も納得のゆく形であったと断言できる。

また「合作」を完成するまでのプロセスもきわめて重要であったと言える。子どもたちとの詩の中でのコンタクト、直接の練習を通してのコミュニケーション等々で次第にこのテーマに関する共通意識が音楽の中で高められていった。本番当日の聴衆と合同で歌うという発想はすべての演奏会において効果的とは思えないが、今回に関しては本堂の限られた空間の中で聴衆が歌う歌わないに関わらず、その臨場感による一体性があったと感じられる。プログラム構成では、子どもたちの歌の手前で東北民謡の編曲作品を置き、東北民謡の特有のペーソスや生命感をここで提示したことも有効であったと考えられる。（草野）

ー2 アート活動について

これまでの作家による作品展示の形式は、作品を見せ

る側（表現者）と見る側（鑑賞者）という限定的な立場に分けた。そして、企画者はその役割をそれぞれが十分果たすことを期待してきた。しかし美術館や画廊等と比べ、強固にその役割を期待しない寺院では、鑑賞者は作品と共に独特な空間をも楽しむことができ、また表現者にとっても新たな表現の場を得ることができた。しかし、今回は表現する喜びの大切さを知った東北の活動を踏まえ、そのような立場を取り払い、これまでとは異なったコミュニケーションの形式を提示するため、誰もが参加できるワークショップを企画し実行することができた。アート活動によって「東北に関わって何かできないか」という思いに、現在のアートフォーラムが出した最良の答えだと言ってもよいだろう。

アートのテーマとして、「生」「死」「命」といった要素をはずすことができないと考える。死を身近に感じた震災を背景にしながらも、生き生きと活動した時間を企画者側も共有できたことは意義深いことであった。特別な東北支援プロジェクトではなく、普段考えるアートの延長線上にある活動として、人との関わりの中で継続していくことが重要である。（佐部利、二村）

ー3 子どもたちの変化について

今回は特に子どもたちの参加が重要な意味をもっていた。先述したように役割を超えて、自ら参加する意義と共に、企画者側に人をつなぎ、育てる環境をつくるという寺院本来の役割を再認識させた。これまで、この寺院空間を芸術的な意味において、独特の空間と捉え活かすことでは成果を上げてきたが、日常から離れ、学校などの枠組みとは別の空間として、「居場所」を提供できたことは大きな成果だったと言えよう。東北から移住したK氏は、「学校や家庭などとは全く違うコミュニティがこの岐阜アートフォーラムであって、そこに自分の新たな居場所を見つけることができた」という報告がされた。

また東北から移住した子どもたちの変化を、夏から秋へと活動を継続する中で感じる事ができた。ワークショップでは、不安の表れとも捉えられる行動を見せた子どももいたが、コンサート会場では積極的に仕事を手伝う姿や自ら話しかける様子があった。事実K氏から「絵を描いて自慢できた子どもは自信をつけ、歌詞に挑戦した子どもは、その後の生活面でも前向きにがんばるようになった」との嬉しい報告があった。そして子どもたちの成長を父兄も感じ取り、活動参加を肯定的に捉えられるように変化したようだ。

さらに空間と時間を一にすること以外に、美術と音楽の融合をどう図るかという問題がこれまでも浮上していたが、子どもたちの活動が軸となり、美術と音楽を時間的に、そして内容的にもつなげる役目を果たしたと言える。

当日会場では31名からアンケートを得た。その内訳は

40代から80代まで幅広い世代に渡っている。中でも第2回からのリピーターが約半数をしめ、回を重ねる度に認知度が上がってきたことは、アートフォーラムの継続した活動の成果であろう。アンケートで最も多かった意見は「子どもたちの大作絵画が素晴らしかった」(40代女性)、「子どもたちの合唱に感動した」(50代女性)で、やはり訴求力は子どもたちにあったようだ。子どもたちによる“アートパフォーマンス”として、来場者の感動を呼ぶ結果となったと言える。「非常に心地よい空間」(80代男性)、「母親の胎内のような不思議な感覚」(40代女性)と言った声からも、会場の一体感が図られていたことが見てとれ、企画者の思いが形になったと言える。このことは「子どもたちの絵、コーラス、チェロの演奏すべてが響きあって心豊かになりました」(60代女性)との声に言い当てられている。またアートフォーラムには多くのスタッフが関わっているが、子どもたちの参加により、多くのことを感じ考える機会となった。初めて会った子ども同士やスタッフが開放的な境内で遊んでいる姿が見られ、交流が自然に行われていた。スタッフの一人小森からは、それこそが「響き合う心」ではなかったかという意見があった。また「今回は特に相互扶助について考える場を与えられ、まさに社会教育の場となっているように思う」とのスタッフ澤田⁵⁾の意見や「スタッフが的確に仕事をこなし足並みを揃えたことに感動した」というスタッフ高松⁵⁾の意見からは、参加者同士が様々な関係性を築き上げていくことができたと言えよう。そして、それぞれが今回の活動を通して、自らの参加意義を見つけたことは一つの成果と言える。

岐阜という地方都市で、「地域社会のつながりが希薄になる中、学校と言う枠組みを離れ、お寺と言う独特の空間に自発的に集まった子どもたちや大人が、礼儀や躰を意識しながら美術や音楽に触れる機会を提供するアートフォーラムの存在意義は大きいと思う」という澤田の意見に加え、東北を思い活動した今回のアートフォーラムは、紆余曲折しながらも、子どもたちの力によって様々な成果を得ることができたと言える。(二村、小笠原)

IV 課題

これまでの報告⁶⁾では、岐阜アートフォーラムは、寺院群を芸術活動の拠点として文化の発展を目指しており、地元で制作活動をする造形作家や音楽家らが歴史ある空間に作品を発表することで、美術館やコンサートホールとは違い、非日常的かつ、その地域特有の展開を期待することが出来るとのまとめに至った。

しかし、第4回アートフォーラムでは、東日本大震災に起因する地縁にとらわれない新たなコミュニティの在り方と捉え方、これらとアートフォーラムとの関係性の持ち方を巡り、計画から実施段階に至るまで実行委員会

の中で一つの意見に集約されない場面があった。それらを下記に示し、今後のアートフォーラム開催に向けて課題とする。

ー1 計画段階での課題

今回の企画は、実行委員会有志数名による東北の現場視察から始まった。その後の意見交流会では、実際に震災を体験し岐阜市内に移住した二つの家族と、その支援団体の代表者を迎えて行われた。その際にアートフォーラム側の被災地に対する何か力になりたいとの思いが十分先方に伝えられないまま行われ、配慮が欠ける結果となったことは反省したい。

移住した家族の父親であるY氏からは「被災した子どもとしてではなく、あくまで今、岐阜に住む子どもとして捉えて欲しい」とのとまどいの心情が伝えられたのだが、新聞各記事には震災を文脈に含んだ上での活動として取り上げられた。結果としては当日の集客に繋がるのだが、上記の心情への適切な配慮としてどうだったかは実行委員会の中でも議論が進むことはなかったし、批判的な意見を出しづらい雰囲気を作られた。今後このような活動に対しては主催者として意図を的確に先方に伝えたいというところを課題としたい。(堀)

ー2 当日の課題

当日は東別院の本堂という宗教施設が会場となり、舞台背景には子どもたちによって描かれた絵画が天井から吊り下げられた。作曲家の草野が作った楽曲に合わせて、被災地や県内の子どもたちによって創作された言葉を元に作られた詩を添え、関わった子どもたちと地元の子ども合唱団が歌い上げた。そこにチェリストの金谷とピアノの谷を加えた編成で演奏した。熱心に聴き入る観客は、感動的な雰囲気に浸ることができた様子がアンケートからも伺える。

しかし、会場の募金箱の設置や、コンサートの収益の幾分かを募金したこともあり、芸術活動というより先の大震災による被災地の救援という目的に偏りすぎた感がある。佐部利のアートワークショップによる巨大な絵画は、寺院空間を今ここでしか味わえない空間に一変させる効果があった。また、コンサート終了時に金谷は挨拶で、被災地の住人であると同時に演奏家という狭間での葛藤を通して、やはり自分は演奏家であると言い切った。絵画作品も演奏作品も芸術性の高いものであるから、鑑賞者がそうした芸術性に浸れる導きのようなものが必要であった。

画家である藤田嗣治の作品「アツツ島玉砕」を例に挙げると、戦争という絶望的な中での人間を描くことは、芸術の独立性を守るため必死の抵抗と感じ取ることが出来る。極端な一例ではあるが、どのような状況の中でも、芸術に携わる者はその持つ本質的な意味を常に問い続ける必要がある。(佐藤(昌))

－ 3 今後の課題

今後のアートフォーラムの持ち方として、実績を持つ芸術家の作品紹介にとどまらず、若い芸術家の展示や芸術の実験的試みなど、アートのもつ面白さや奥深さを味わえる機会となるとよい。作家の持つ芸術性をのびのびと引き出すことが重要である。

これまでのコンサートを伴った企画において、集客面では良い結果が得られている。今後、美術作品展示に主眼をおいて企画を行った場合、これまで行ってきた2時間程度のイベントの形とすることは難しい。仮に1週間単位での時間の展示とした場合も、不特定多数の人間が出入りする寺院の場所の特性上、まとまった期間を占有することや、管理面の問題もあり工夫が必要である。その上で、期間や集客の工夫をバランスよく組み合わせる展開の検討が求められる。

また、震災復興に向けてさまざまな形で支援の必要はあるが、別の部門あるいは組織を立ち上げるなど、アートフォーラムの活動とは切り離れた上で、今回はこの章の冒頭で述べたような本来の趣旨に立ち返った活動としたい。(奥村)

おわりに 結語

これまでの岐阜アートフォーラムの活動では、寺院空間における芸術文化の創出と発信をテーマに、アートを手掛かりとした精神、感性の拡張と凝縮、人々との交流を特徴としていた。それに加えて本稿で報告した活動では、寺院の持つ祈りの空間としての特徴を際立たせ、子どもたちから未来への希望をメッセージとして、アートを介して地域社会から発信することが出来たことが一つの成果といえるのではないかと考える。

そこにはアーティストのみならず、活動を支援する市民、当日集まった観客それぞれの、社会的立場や職能、金銭での東北大震災に対する支援の形があった。移住してきた家族らと共に生き、現実に立ち向かう権利があることを確認したことも、次への活動の一つの指針となりえると考えられる。

このような形態での活動となったことに対して、岐阜新聞記者の林進一は「やわらかな運動体」による文化活動と表現している。

《有志らの被災地訪問に私(林)が同行取材したのは、アーティストの鋭敏な感性が、被災者・非被災者の二分法を超え、自らの体験・課題としてこの大災害を受け止めるのでは、と思ったからだ。震災という社会的事象は人々に共通ではあっても、体験の形はそれぞれ異なる。幅広い市民が参加した今回のフォーラムは、もとより単一目標、評価でくくれない性質を内包していた。その広がりゆえに、良くも悪しくも「やわらかな運動体」、ときに「あいまい」にならざるを得なかったものの、多様

な意見や提案に耳を傾ける精神と行動の“やわらかさ”なしには何事も成立しなかったはずだ。震災復興が短期で済まないのと同様に、参加者一人一人が今回の課題を負い、考え続けていくほかはない。芸術作品が個々の創造の追求でありつつ多くの人に共感・感動の奇跡をもたらすことは、“壁”を破り、越境するアート本来の魅力、特性だろう。それは大震災の被災者、非被災者の区分けを解き放つことにもつながるのではないだろうか。》

本稿で述べた企画の過程においては、かかわる人それぞれに多様な価値観があり、それに起因する発言も多様であった。決して一つの意見にまとまった訳でもなく、移住してきた家族や、東日本大震災での被害に対して、物理的に何が出来たのかは明らかではない。しかし、林の述べた「やわらかな運動体」の中で見ることの出来た子どもたちの笑顔が、被災した厳しい現実を背負い、並走せざるを得ない私たちの救いとなったことを確認し、本稿のまとめとする。(堀)

註

- 1) 美術と音楽が融合したコンサートのこと。
- 2) 小笠原宣(おがさわらのぶ) 上宮寺住職 画家、1952年岐阜市生まれ。1974年京都・大谷大学真宗学科卒業(在学中下村良之介に師事)、1983年岐阜県美術館開館記念展で洋画部門賞、1984年第27回安井賞展で安井賞受賞、2000年コペンハーゲン、2010年リトアニアなどで個展多数開催。
- 3) 衣笠文彦(きぬがさふみひこ) 岐阜聖徳学園大学短期大学部非常勤講師、1954年岐阜市生まれ。1979年愛知県芸術大学美術学部彫刻科卒業、アメリカ、メキシコを始め中国、イタリアなど世界各地に旅行、滞在、中部総合美術展など企画展、2006年ローマなど個展多数開催。屋外彫刻モニュメント多数設置。
- 4) 草野次郎(くさのじろう) 兵庫教育大学大学院教授、1955年京都市生まれ。1979年愛知県立芸術大学大学院作曲専攻修了、作曲を石井敏、保科洋の両氏に師事、1990年文部省在外研究員としてミュンヘン音楽大学のD・アッカー教授のクラスで研鑽をつむ。1996年朝日賞など受賞多数。
- 5) 第4回アートフォーラム実行委員・スタッフ小笠原宣、佐部利典彦、衣笠文彦、草野次郎、二村元子、林紕さ子、高橋和江、小森真人(東北支援活動等を行う)、神谷まさ子、高松秀進(歯科技工士、主に会場設営担当)、澤田健司(主に録音録画担当)、佐藤瑛気、吉田侑記子、堀祥子、河西栄二、佐藤昌宏、奥村晃史、K氏(東北より岐阜に移住)、Y氏(東北より岐阜に移住)、豊田純、柳瀬とよこ、宇佐美直子、松井善真、小笠原まや、小笠原人、小笠原知佳、小笠原保、小笠原恵梨、川島安弓美、岡本朋子、大森美瑠、土谷実来、

- 6) 小笠原宣・衣笠文彦・草野次郎・佐部利典彦・二村元子・奥村晃史・堀祥子・佐藤昌宏・河西栄二(2013) : 歴史的寺院空間における美術文化の創出と発信～岐阜アートフォーラムの活動報告～ 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)第61巻2号、123-139
- 7) 林進一(はやししんいち) 岐阜新聞記者(元文化部長・論説委員)1950年大垣市(旧不破郡赤坂町)生まれ。74年岐阜新聞入社。文化部時よりアーティスト取材などが縁で、内モンゴル自治区美術交流、東日本大震災被災地に同行取材。
- 8) 金谷昌治(かなやまさはる) 福島大学人間発達文化学類教授、東京ハルモニア室内オーケストラ団員、カメラタ・セシリア主宰、1980年東京芸術大学大学院修了、2000年東京ハルモニア室内オーケストラ・チェココンサートツアー2000など公演多数。
- 9) 佐部利典彦(さぶりのりひこ) 画家、1969年岐阜県生まれ。1992年岐阜大学教育学部美術工芸科卒業、1994年愛知教育大学大学院修了、伊藤廉賞展などコンクール出品、個展開催。岐阜県内、横浜、震災後の東北などで、子どもたちや障がいをもつ人と活動を行う。また、カナリヤ諸島、スロベニア 中国張家界など海外で制作、ワークショップを行う。
- 10) すどう美術館は、小田原市にある個人美術館であり国内外の現代美術作家の作品展やアーティストインレジデンスなどを行っている。関連作家や美術館スタッフにより、「チームすどう美術館」として東北支援芸術活動にも取り組んでいる。
- 11) 佐藤瑛気(さとうえいき) 心理カウンセラー・イラストレーター・岐阜への避難者や東北の支援活動をするエイキエイド参加。
- 12) 守山繭子(もりやままゆこ) 兵庫教育大学芸術系コース卒業後、同大学大学院に進学し修了。声楽を保坂博光に師事。平成23年第8回兵庫教育大学芸術系コース演奏会(「蝶々夫人」より“ある晴れた日に”)、平成24年、茨城新作音楽展(新作歌曲「いつまでも、いつまでも」)などに出演。
- 13) 谷峰子(たにみねこ) 全日本ピアノ指導者協会正会員。愛知県立芸術大学大学院修了。「日本演奏連盟オーディション」に合格し名古屋フィルハーモニー交響楽団等と協演。また神戸合奏団チェンバリストとしても活躍。ピアノを故オスカー・ケーベルらに師事。東京芸術大学弦楽科助手、愛知県立芸術大学音楽学部講師など歴任。
- 14) 二村元子(ふたむらもとこ) 彫刻家、1973年岐阜県生まれ。1996年 岐阜大学教育学部美術教育講座卒業、1999年同大学院美術教育専修修了、2004年アトスペース Citta(各務原)、2008年アクティブG(岐阜市)など個展多数開催。障がいを持つ人とのグループ

展なども行っている。

写真出典

- 写真1・10草野次郎撮影
写真2・3・4・5・6・9 佐部利典彦撮影写真
写真7 絵画ワークショップチラシ 原画 佐藤瑛気
写真8 第4回ポスター 制作 神谷まさ子
原画 小笠原宣
写真11 2012年10月16日岐阜新聞朝刊、林進一撮影

[譜例1] 旋律 「岐阜の子どもたちへ in A 旋律のみ」

3

6 1.

9 2.

12

15

18

21

24

[譜例2] みんながいれば

みんながいれば

Moderato

♩ = 88

Piano *mf*

The piano introduction consists of three measures in 4/4 time. The right hand features a melody of eighth notes with slurs, while the left hand provides a rhythmic accompaniment of eighth notes. The key signature is two sharps (F# and C#).

4 *mp*

1. あめ
2. あお
3. みんな

Pf.

The piano accompaniment for the first vocal line starts at measure 4. It features a complex texture with sixteenth-note patterns in the right hand and a steady eighth-note accompaniment in the left hand. The dynamic is marked *mp*.

8 **A**

あ が りの そら を に じ が か か っ て い る あ め
く ひ ろ が る だ い ち き み は と び た つ ん だ ゆ め
な み ん な い れ ば み ん な み ん な い れ ば み ん

Pf.

The piano accompaniment for the second vocal line starts at measure 8. It continues with the same rhythmic patterns as the first line, providing a consistent accompaniment for the vocal melody. The dynamic is marked *Pf.*

12

あ ーがりの そらをー そらを にじ が かかっ て い
 と ーきぼうを のせてー みらい へと はしっ て ゆ
 な ーが ん ば れるよー が ん ば れる が ん ば れる

12

Pf.

15

B *mf*

る こ と り が と ん で い る こ と り が と ん で い
 け き み な ら ー で き る と き み に は で き る
 よ た と え さ み し く と も た と え さ み し く

15

Pf.

19

る おひさまのひかりが さし こんーでいー
 と みんなでちからを あわせ あわせとべ
 とも みんながいるから だいじょーぶだー

19

Pf.

23 C *f*

る ま わ り の ふ う け い は や ま に か こ ま れ
 よ い ま ひ か る と き よ い ま み ら い に は し
 よ み ん な が い る か ら だ い ー じ ょ ー ぶ だ

Pf.

27 *ff* *f*

て ト ラ ン ペ ッ ト が お か で ー な ー つ
 る き つ と み ら ー い は ー す ば
 よ み ん な が い る か ら ー だ い

Pf.

31 1, 2.

て ー い ー る
 ら し い だ ろ う
 じょ ー ぶ だ

Pf.

35 **3.**

よ

Pf.

39

Pf.

mf

42

Pf.

mp

The image shows a musical score for piano and voice. It consists of three systems of staves. The first system (measures 35-38) features a vocal line with the syllable 'よ' and a piano accompaniment. The piano part includes a triplet of eighth notes in the right hand and a rhythmic pattern in the left hand. The second system (measures 39-41) continues the piano accompaniment with a dynamic marking of *mf*. The third system (measures 42-44) concludes the piece with a dynamic marking of *mp* and a final cadence. The key signature is three sharps (F#, C#, G#) and the time signature is 4/4.